

『日本アジア研究』第7号(2010年3月)

両漢開国中興伝誌・全漢志伝版本源流考

大塚秀高*

以下は、いずれも海内の孤本として世に名の高い、『両漢開国中興伝誌』と『全漢志伝』の蓬左文庫蔵本の版面を綿密に検討し、両者のそれぞれにつき、現存のテキストが刊行されるにいたるまでの編輯、出版の経緯について論じたものである。

キーワード：『両漢開国中興伝誌』、『全漢志伝』、『漢書故事大全』、余氏、楊氏

一 両漢開国中興伝誌版本源流

蓬左文庫所蔵の『両漢開国中興伝誌』は全六巻(各冊二巻全三冊)からなる。本文題は、いずれの巻にあっても「京板全像按鑑音積両漢開国中興伝誌」と変わらない。ただし、本文題と本文の間、巻頭次行、次々行の記載は各巻で異なる。とはいえ、そこには以下のごとき規則性が見える。

巻一：「撫宜 黄化字 校正」「書林 詹秀閩 繡梓」

巻二：「書林 詹秀閩 梓行」

巻三：「撫宜 黄化字 校正」「書林 詹秀閩 繡梓」

巻四：空白一行

巻五：「撫宜 黄化字 校正」「書林 詹秀閩 繡梓」

巻六：空白一行

すなわち、蓬左文庫所蔵の『両漢開国中興伝誌』の版木は、本来、各冊冒頭の奇数巻のみに「撫宜 黄化字 校正」、「書林 詹秀閩 繡梓」の二行の文字を刻し、偶数巻にはこのいずれか、ないしはこれとまったく異なる文字一行を記すものであった。その後、この版木の所有者により、偶数巻の問題の行が削除され、そのうちの一冊目の巻二のみに「書林 詹秀閩 梓行」の文字が埋木改刻された。埋木改刻の事実については、当該の文字が前後の行のそれに比し一回り小さく、「梓行」が奇数巻の「繡梓」と異なるから、ほぼ確実である。よって、削除された文字が「書林 詹秀閩 繡梓」であった可能性はなくなる。二冊目以降の偶数巻の巻頭次行が空白のままなのは、埋木改刻の手間を惜しんだとみられる(つまり、削除さえすればあえて埋木改刻せずともよかったことになる)。そこで、この間の事情については以下のように想定してみたい。すなわち、そこには詹秀閩以外の書肆の名があり、詹秀閩がそれを「書林 詹秀閩 繡梓」に埋木改刻しようとしたのだが、最初の巻二で「繡梓」を「梓行」と誤ってしまい、以後はその方針そのものが放棄された、と。当初は詹秀閩と某書肆の共同出版であって、多く出資した詹秀閩が奇数巻に、少額出資の某書肆が偶数巻に名を出していたのだが、詹秀閩が後に某書肆の権利を買い取り、その名を削除したといったシナリオも考えられるかも知れない。

ところで、『両漢開国中興伝誌』の巻頭には、上部に図、下部に「按鑑増補全像両漢志伝」と二行に大書し、中間に「西清堂詹秀閩蔵板」と記す封面が冠

* おおつか・ひでたか、埼玉大学教養学部教授、中国文学

されており、巻六大尾には「長篇古風」詩に続き「万曆乙巳冬月詹氏秀閩梓行」の文字の見える蓮牌木記が置かれている。封面の「按鑑増補全像兩漢志伝」と、本文題の「京板全像按鑑音積兩漢開國中興伝誌」は微妙に異なる。角書部分を除いた「兩漢志伝」と「兩漢開國中興伝誌」を比べても、「志伝」と「伝誌」が異なる。ちなみに『兩漢開國中興伝誌』の尾題は、本文題と完全に一致する大尾、尾題を欠く巻三、「兩漢志伝」とする巻二を除いては「兩漢伝誌」であって、「兩漢志伝」とは異なる。つまり『兩漢開國中興伝誌』の略称は、たまさか「誌伝」とする例はあっても、「伝誌」であって「志伝」ではないといえる。詹秀閩が本文の版木を製作した書肆であるなら、書物の看板とも言える封面で、「伝誌」を「志伝」に誤るものであろうか。封面が「蔵板」といっているのも気になる。

案ずるに、『兩漢開國中興伝誌』の封面に見える「兩漢志伝」は、続編を矢継ぎ早に出版し、市場を席捲しつつあった『全漢志伝』系統の版本を意識し、意図的に本文題と変えたものではなかったか。『全漢志伝』の「叙西漢志伝首」ならびに「題東漢志伝」は、いずれも万曆十六年の紀年を持つ。『兩漢開國中興伝誌』の蓮牌木記に見える万曆乙巳はその三十三（1605）年にあたり、以上の想定と矛盾しない。さすれば、蓬左文庫所蔵の『兩漢開國中興伝誌』が万曆三十三年に詹秀閩西清堂から刊行されたもの（ないしはその後印本）であることは間違いないとして、本文題を『全漢志伝』の存在を意識した「兩漢志伝」としない本文版木の版刻時期（埋木改刻以前の版本による初印本の出版時期）については、これを遡り、場合によっては『全漢志伝』刊行の万曆十六年以前となる可能性もでてくることになる。確実にいえることは、蓬左文庫所蔵の『兩漢開國中興伝誌』の出版が万曆三十三年を遡らないことと、その埋木改刻以前の版木の製作時期が万曆三十三年を下らないことの二つである。

ところで、蓬左文庫所蔵の『兩漢開國中興伝誌』の版面から既述の埋木改刻部分をもとの状態に戻したテキストを想定した場合、そのテキストは『兩漢開國中興伝誌』の初版本と同等なものともみなせるのか。筆者の見解は否定的である。オリジナルなテキストであれば存在する可能性の低い叙述の混乱が、蓬左文庫所蔵の『兩漢開國中興伝誌』にはまま見られるからである。巻六の東漢部分に例をとって説明したい。

『兩漢開國中興伝誌』巻六の冒頭近くに、聚獸牌という、これを打ち動かせば狂風が吹きすさび天地が暗くなるという牌を持つ王莽軍の巨無霸に手を焼いた蕭王（劉秀）が、鄧暉に陳俊を率いて夜襲をかけさせる場面がある。ところが、その後に叙述の混乱が始まり、陳俊がいつのまにか傳俊になってしまうのである（以下の『兩漢開國中興伝誌』のあらすじの紹介では「○俊」とする）。

乱軍の中で王莽軍の副将王邑を見かけた○俊は、単騎これを追跡する。

王邑は古廟に逃げ込み○俊を待ち伏せる。○俊は王邑の鉄鞭に重傷を負い、その場を離脱し、路傍の庄園の主に援けを求める。庄園の主は蕭王の部下陳俊の父であり、これに○俊は援けられた。

つまり、○俊が陳俊ではストーリーの展開に齟齬を来たしてしまうのである。この矛盾を解消するためには、主人公を陳俊、庄園の主を傳俊の父とするか、逆に主人公を傳俊、庄園の主を陳俊の父に改めるかしかない。まずは『兩漢開國中興伝誌』の原文を掲げよう（庄園の主の名については口で囲み、○俊については下線を付した）。

第二日見馬武在城上，鄧惲即修下一書，縛于箭，射上城去。馬武拾得此書，來報蕭王，言“今晚幸火為號，相應劫寨。”蕭王大喜，傳令與衆將領軍接應。至晚，果見火號起。蕭王領軍一千，出城接應。鄧惲一人領軍搶入先鋒寨內，見聚獸牌，拿着橫繩打動，鈴響。驚起巨無(毋)霸來，即綽合扇刀出帳。鄧惲領陳俊軍一迷劫殺。衆軍却奔元帥帳來。巨无霸于黑暗處見營中光起，輪刀，趕殺自軍无数。副元帥王邑令衆救火。傅俊于火光中望見，持鎗直刺王邑。約聞兩合，王邑敗走。陳俊隨後追趕得緊。王邑出營，約走二十余里，向大路邊見一古廟。王邑將馬拴于廟後，衣正殿內躲身。傅俊趕至廟前，亦拴了馬，提劍直入廟來，要捉王邑。王邑一見，躲於門背後，持鞭等候傅俊。俊不隄防，一頭撞入來。王邑看見，手中輪起鉄鞭，向胸膛正打着一鞭。早是蕭王有福，俊不該死，那一鞭連門扇帶胸膛着一下。傅俊忍痛跳出來，仗劍言道“出來，必定一人死。”王邑心中惧怯，只疑這一鞭打不曾着緊，緊閉上廟門，不敢出來。多時傅俊持鎗上馬出來，至廟(××××)口中吐血。約行數里，到一庄，見一老人。傅俊拜曰“小人是刘文叔手下末將傅俊。因趕王邑到廟中，不意賊子躲于門後，暗算我一鞭。今疼痛難忍。”老人曰“我乃陳俊父也。將軍下馬，於老拙家中養病數日，待好了再去。”傅俊謝了。遂別處拴了馬足，扶俊於西屋中卧。其痛難忍，口不住声叫疼。(×は直前の文字が，その数衍字とみられることを示す)

この部分、『全漢志伝』ではすべて傅俊に統一されている。

第二日，見昆陽城上一將巡城，鄧惲寫密書，縛于箭頭射去。巡城將馬武檢得，進與蕭王。蕭王看取，言“今晚舉火為號，相應劫寨。”蕭王傳令準備。至晚，見王軍營內火起，蕭王令傅俊領一千軍出城，見了鄧惲，引入先鋒寨。打動橫繩，鈴響。驚起巨无(毋)霸，黑裏輪刀趕戰。王軍慌亂，自相踐踏，死者無數。有副元帥王邑，勒馬殺將來。正遇傅俊持鎗直取王邑。約聞兩合，王邑敗走，傅俊不捨力追。出營約走二十里，天色微明，見路邊一古廟。王邑將馬拴在廟後，走入門後躲身。傅俊至廟前，亦拴了馬，提劍入廟來。不防王邑持鞭等候，見傅俊入門，手中輪起鉄鞭，向胸膛打着。如何？

可怜英勇興邦將 誰想今朝鞭下亡

那一鞭連門扇帶胸膛着一下。傅俊忍痛跳出，仗劍言曰“逆賊，出來。必報其仇。”王邑緊閉了門，不敢出。多時傅俊持鎗上馬，口吐鮮血，約行七八里，到一庄所，見着老人。傅俊曰“小人是漢蕭王部下末將傅俊。因趕王邑到廟中，不意逆賊門後暗弄我一鞭，今疼痛難忍。”老人曰“我乃陳俊之父也。將軍於老拙家養病。待安痊而去。”傅俊稱謝。遂別處拴了馬，於西舍養病。口中不住声叫疼。

ちなみに新発見の『漢書故事大全』¹では以下のようにになっている。

第二日，見馬武城上，推(射?)箭。馬武箭上帶書入城，言“今晚舉火為號，相應劫寨。”尚(蕭)王知，令傳與領軍接應。至晚，見火號起，尚(蕭)王領軍一千出城，見鄧惲，二人領軍入寨，來至先鋒寨，見聚獸牌，拿着打動橫繩，

¹ 『漢書故事大全』については、『平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書 ヨーロッパ現存中国学資料の研究』(2007年)に収められる氏岡真士「『漢書故事大全』について」を参照されたい。なお、本稿に引く『漢書故事大全』の原文は、同書所収の上野隆三、氏岡真士『漢書故事大全』校定稿を参考に、筆者において標点しなおしたものである。上野、氏岡両氏の学恩に感謝する。

鈴響。驚起巨無(毋)霸來，綽合扇刀出帳。鄧惲領陳俊軍一迷劫殺。衆軍却奔元帥帳來。有巨無(毋)霸黑里輪刀，趕殺自軍無數。有副元帥王邑打火來。傳俊望見，持鎗直撞王尋。約鬪兩合，王尋敗走，陳俊後追得緊。出營約走二十里，向大路邊，見一古廟。王邑將馬拴在廟後，走正殿內躲身。陳俊至廟前，亦拴了馬，提劍入廟來。王邑覩見後，門背後持鞭等候，陳俊抽身往廟來，王邑見人來，手中輪起鐵鞭，向胸正打着。如何？

可憐英勇興邦將 誰想今朝鞭下亡

那一鞭連門扇帶胸膛着一下。陳俊忍痛跳出來，仗劍言道“出來。必定一人死。”王邑關上門，不敢出來。多時陳俊持槍(鎗)上馬，出廟回來，口中吐血。約行七八里，到一莊，見一老人。陳俊曰“小人是漢劉文叔手下末將陳俊。因趕王邑到廟中，不意賊子門後暗弄我一鞭，今疼痛難忍。”老人曰“我乃傳俊父也。將軍下馬，於老拙家中養病。可後去。”陳俊謝了。遂別處拴了馬，扶陳俊於西屋中臥，口中不住聲叫疼。

一見して明らかなごとく、『漢書故事大全』にも○俊をめぐる混乱が見られる。『漢書故事大全』の編者は陳俊を正しいとみて、それに統一しようとした。最後に登場する庄園の主を陳俊ではなく傳俊の父と改めたことにより、それは明らかである。ちなみに、劉秀軍に集う諸将は二十八宿が下凡したものとされ、最後にその出自が明らかにされることになっており、そのリストに、『全漢志伝』は「琅邪太守封祝阿侯」で畢月烏の陳俊と、「積弩大將軍封昆陽侯」で背火猴の傳俊が挙げられているのだが、『兩漢開國中興伝誌』と『漢書故事大全』では畢月烏の陳后と背火象の傳俊となっていて、陳俊は登場しない(『漢書故事大全』は最後の一葉を欠き、リストは不完全だが、この部分は残っている)。『兩漢開國中興伝誌』や『漢書故事大全』はここでも混乱している。背火象も背火猴が正しい。

『漢書故事大全』には、王莽軍の副将の姓名にも混乱が見られる。『全漢志伝』、『兩漢開國中興伝誌』がすべて王邑とするものを、時に王尋としているからである。举例は省くが、『漢書故事大全』は『兩漢開國中興伝誌』に近い。だが、人名の相違などから、『全漢志伝』によったとみなせる部分も存在する。だが、『漢書故事大全』を『全漢志伝』、『兩漢開國中興伝誌』の源頭に立つ作品とみるには無理がある。『漢書故事大全』は、『全漢志伝』と『兩漢開國中興伝誌』の刊行以降に、『兩漢開國中興伝誌』を底本に、『全漢志伝』を参照しつつ新たに作られた作品とみるべきであろう(この点は別稿で論じたい)。とはいえ、『漢書故事大全』の編者が参照した『全漢志伝』や『兩漢開國中興伝誌』が蓬左文庫所蔵本と同じ状況のものだったとは限るまい。『漢書故事大全』の出版時期にしても、蓬左文庫所蔵の『兩漢開國中興伝誌』刊行の時期以降に限定される必要はないのである。

そもそも蓬左文庫所蔵の『兩漢開國中興伝誌』には、文字が刻されないままに終わった墨格がまま見られる。版刻の際に依拠したテキストが邈邈本で、文字の判読ができなかったためであろう。よって、筆者としては現存の『兩漢開國中興伝誌』の埋木改刻以前の版本とは別に、これに先行し、その原拠となったテキストがあったとみておきたいのである。

『前漢書平話統集』をこれに対応する『全漢志伝』、『兩漢開國中興伝誌』と比較すると、増補の量は『全漢志伝』の方が『兩漢開國中興伝誌』より圧倒的

に多いことに気づく。また、『全漢志伝』における増補が、『続集』の上、中、下三巻の区分についていえば、上、中、とりわけ上に集中し、下にほとんど及ばないこともわかる。すなわち、『前漢書平話続集』部分に限っては、改定は竜頭蛇尾に終わったのである。このことは、後漢部分についても『両漢開国中興伝誌』の方が『全漢志伝』に比し、「全相平話」の原姿をより多くとどめている可能性を示唆する。ひるがえって、先行して出版されたテキスト（『全漢志伝』）に存在しない矛盾が後日出版されたテキスト（『両漢開国中興伝誌』）に存在するとしたら、後日出版されたテキストが、先行し矛盾を修正したテキストではなく、修正以前のテキストに直接依拠したか、実は後日の出版ではなく先行して出版されていたかのいずれかであろう。いずれの場合も『両漢開国中興伝誌』の依拠したテキストは『全漢志伝』以前のテキストということになる。問題は、そのテキストが熊鍾谷の手が加わる以前の、「全相平話」により近いテキストないしは「全相平話」そのものであるのか、はたまた『全漢志伝』の熊鍾谷原編本であるのかであるが、これ以上の推論は慎んでおきたい。

二 全漢志伝版本源流

次に『全漢志伝』系統の版本の出版過程について論じたい。蓬左文庫所蔵の『全漢志伝』は、前、後半各一冊、各冊六巻からなっている。第一冊巻頭には、柱題を「西漢序」とする「叙西漢志伝首」、首題を「全相演義西漢」、尾題を「全相演義西漢大全志伝」とする目録、第二冊巻頭には、柱題を「東漢序」とする「題東漢志伝序」、首題を「全相演義東漢」、尾題を「全相演義東漢大全志伝」とする目録を冠する。各巻の本文題ならびにその次行、次々行の記載、尾題については、拙稿²ならびにそこに収めた「全漢志伝・両漢開国中興伝誌対照表2」を参照していただくとして、ここではそこで言及しえなかった点、その後気づいた点などを補説したい。

前半西漢部（以下「西漢志伝」とよぶ）の巻一、二の第一行下部には西漢の囲み文字があり、柱題は巻一が西漢、巻二の第一～六葉が西漢、第九葉が漢書、これら以外の葉が前漢である。巻三、四には囲み文字がなく、柱題は巻四の第二十五、二十六葉が西漢であるのを除き、前漢とする。巻五、六の柱題は巻三、四と同様前漢だが、前集の囲み文字を有する。後半東漢部（以下「東漢志伝」とよぶ）の巻一、二には囲み文字の東漢があり、柱題も東漢だが、巻三～六の囲み文字は後集であり、柱題も後漢である。この版面の状況に鑑み、先に論じた『全漢志伝』系統のテキストの出版過程を、以下のごとく想定したい。すなわち、

- I 西漢三巻、東漢二巻からなる、嘉靖期に出版された熊鍾谷原編本。
- II Iを基本的に継承しつつ全相本とした原刊本（京本）。
- III IIの巻二部分（『前漢書平話後集』相当部分）を簡略化し、巻三（同じく『続集』相応部分）から一部を移したうえ、巻三の各所に増演を施し、新たに創作した末尾部分とあわせて巻三、四とし、西漢四巻東漢二巻の全六巻とした増演本。増演とその影響により版木を新たにせざるをえなくなった部分の柱題が、この折に西漢から前漢（一部は漢書）に変わっ

² 「全漢志伝・両漢開国中興伝誌・漢書故事輯校本（試行本）並びに研究序説」の「研究序説」部分、『日本アジア研究』5所収、2008年。

た。なお、『続集』に対応する部分が巻四第十四葉までであるのに、巻四第二十五、二十六葉の柱題が西漢となっている事実は、『続集』に続く『別集』の存在を示唆するものであるが、それ以前の葉に増刪を施しつつ、この二葉分のみ原葉を残して使用するには大変なテクニックを必要としようから、とりあえず、先の漢書の例と同様、本来前漢とすべきものを誤刻したとみておきたい。

IVa IIIの西漢巻四に続く部分を補作し、前集巻五、六（または巻一、二）とした別本。

IVb IIIの東漢巻二に続く部分を補作し、後集巻三～六（または巻一～四）とした別本。IVa、IVb は同時刊行のうへ別売された可能性が高いが、それぞれ前集巻一、二、後集巻三～六と通巻でセット販売された可能性も存在する。この点については後述したい。

V IIIとIVa、IVbを組み合わせ、埋木改刻をし、目録を新たに作成のうへ、「西漢志伝」、「東漢志伝」それぞれの巻頭に附加した合刊本。余氏克勤齋の二つの序は、IVa・IVbの時点で附されていたものを流用した。

VI Vの版木の書肆名の一部を再度埋木改刻した、Vの修正合刊本。

以下では、まずIVa、IVbとVの関係についていささか補説しておきたい。

筆者は、IVa、IVbは万暦十六年に同時に、セットではなく別売のかたちで、ともに余氏文台から出版され、蓬左文庫所蔵の『全漢志伝』に見える「叙西漢志伝首」と「題東漢志伝序」は、そのそれぞれの巻頭を飾っていたと考える。なぜなら、「叙西漢志伝首」と「題東漢志伝序」を平心に読むなら、「叙西漢志伝首」が冠されたテキストは余氏文台が名公に請うて脩輯し、相（像）を加えて出版したもの、「題東漢志伝序」が冠されたテキストは文台余子の依頼に応じた余氏克勤齋が用意の原稿を全相本として出版させたものということになり、すでに全相本であったはずのIIIを含むテキストの序としては内容に齟齬が生ずるからである。なお、克勤齋が自身の関与しない前集にも序を書いたのは、後集に原稿を提供した関係からであったろう。ちなみに、蓬左文庫所蔵の『全漢志伝』の後集部分の巻頭次行はすべて「余氏克勤齋校正刊行」であって、埋木改刻の痕もない。

ひるがえって、「西漢志伝」の巻四、六、「東漢志伝」の巻二それぞれの巻頭次行の記載により、余氏克勤齋、余氏文台、余世騰の三者を同一人とみる見解が中国では主流である。だが、「克勤齋文台余世騰刊行」と三者を同一人のごとく記すのはすべて埋木改刻部分であるから、筆者としてはこの見解をすぐに認める気にはなれない。「文台」と「余世騰」は同時に埋木改刻されたとみられなくもないが、「克勤齋」については、それに疑問符がつく。そもそも、余氏克勤齋と余氏文台が同一人なら、「西漢志伝」、「東漢志伝」とも名公あるいは余氏克勤齋のどちらかに依頼したでよいはずで、前者を名公、後者を余氏克勤齋と書き分ける必要はあるまい。それに、余氏克勤齋は文学史的には無名で、陳眉公のような大名士というわけではないのだから、実際に補作を担当したのでもない限り、しいて名を挙げる必要はなかった。したがって、筆者としては余氏克勤齋と余氏文台は同族ではあっても別人とみておきたい。この三者のいずれかが余象斗であることは可能性としてはありうるが、筆者はそれを断ずるに足る証拠はないと考えている。

以上を整理すると以下のようになる。すなわち、「西漢志伝」の前集部分

二巻と「東漢志伝」の後集部分四巻が、余氏克勤齋の序を附した全相本として、万曆十六年に同時に刊行された。その後のある時期に、ⅢとⅣa、Ⅳbを組み合わせて、Ⅳa、Ⅳbの余氏克勤齋の序と新たに刻した目録を附した合刊本が刊行された、と。しかく考える理由は、すでにⅢを購入していた者にとってはⅣa、Ⅳbの別売が便宜であったが、Ⅲ未購入の者にはこれとのセットの方が好都合だったはずだからである。以上のごとき臨機応変の販売方法をとらうる書肆は、Ⅲ、Ⅳa、Ⅳbの版木を同時所有していた書肆以外になく、それは文台余世騰においては考えにくい。なお、『全漢志伝』の目録の尾題に「大全」の文字が見える点は、『漢書故事大全』の刊行時期との関係で注目される。

Vの合刊本の版木には、その後再度埋木改刻がなされた。関与する書肆が複数になったからであろう。その痕は、蓬左文庫所蔵の『全漢志伝』の「東漢志伝」巻一次行の「愛日堂継葵劉世忠梓行」の文字に見てとれる。ただし、このVIの段階がVのそれと同時であった、すなわち合刊本作成の際すでに愛日堂継葵劉世忠が関与していた可能性もなくはない。いずれの場合にしても、版木が文台余世騰から愛日堂継葵劉世忠に完全譲渡された可能性は低い。その場合には、「東漢志伝」の巻一はもちろんのこと、「西漢志伝」の巻一も「愛日堂継葵劉世忠梓行」と埋木改刻されたに相違ないからである。蓬左文庫所蔵の『全漢志伝』は、「東漢志伝」巻六後半の摩滅の進んだ状況からみて、この修正合刊本のかかなりの後印本ということになる。

問題は清白堂楊氏である。清白堂楊氏の『全漢志伝』への関与は、巻六大尾に「清白堂楊氏梓行」と書かれた蓮牌木記を抱く人物の繡像が存することにより明らかである。

ひるがえって、楊氏の書肆と熊鍾谷大木が組んで出版した歴史ものの白話長篇小説が二種現存していた。八巻大尾に「嘉靖癸丑（三十二年）孟秋楊氏清江堂刊」の木記を持つ『新刊參采史鑑唐書志伝通俗演義』八巻と、同じく巻八末に「嘉靖壬子（三十一年）孟冬楊氏清江堂刊」の木記を持ち、巻一の第三行のみに「書林清白堂刊行」の文字が見える『大宋演義中興英烈伝』八巻がそれで、前者は中国国家図書館ならびに内閣文庫に蔵される無図本で、後者は内閣文庫の巻頭附図本で知られる。つまり、熊鍾谷原編本は嘉靖三十年代初期に楊氏の清江堂から出版され、全相本ではなかった可能性が高いのである。清江堂（ないし清江書堂）は、明の宣徳から嘉靖にかけ多数の書物を出版した建陽の書肆であるが、杜信孚、杜同書³によれば、全相本は『新增補相剪燈新話大全』四巻、『新增全相湖海新奇剪燈余話大全』四巻のセットを除き、出版していないのである。

一方、同じ楊氏の書肆であり名称も類する清白堂につき、杜信孚、杜同書は、楊江の清白堂と楊先春の清白堂に分けて著録する。これは杜信孚の前著⁴が清白堂を四項に分けていたものを踏襲整理したものと推察されるが、この区分にさしたる根拠はなく、信ずるに足りない。それは、孫楷第の『日本東京所見中国小説書目』⁵の記載を誤読し、内閣文庫所蔵の『鼎鑄京本全像（相）西遊記』二十巻百回を嘉靖三十二年刊本としたこと一つとっても明らかである。

³ 『全明分省分県刻書考』、線装書局、2001年。

⁴ 『明代版刻綜録』、江蘇広陵古籍刻印社、1983年。

⁵ 人民文学出版社、1958年北京第1版、1981年北京第2次印本の73頁。

閑話休題。管見によれば、清白堂は万曆から天啓にかけ、何代かの主人のもとで出版活動に携わっていたとみられるが、積極的に全相本の出版に関与した時期は万曆三十年代であったようだ。明確にこの時期の出版といえるものは万曆三十二年の『新刻全相二十四尊得道羅漢伝』六巻のみであるが、先の『鼎鐫京本全像西遊記』もおそらくこの時期の出版であったろう。

では、既述の『大宋演義中興英烈伝』が、巻八末に「嘉靖壬子（三十一年）孟冬楊氏清江堂刊」の木記を持ち、巻一第三行に「書林清白堂刊行」の文字を持つ点はどのように解釈すべきなのか。巻頭に、「嘉靖三十一年歳在壬子冬十一月望日建邑書林熊大木鍾谷識」を銘打つ「序武穆王演義」を冠する『大宋演義中興英烈伝』の原刊本が嘉靖三十一年の刊行になることに、疑問の余地はない。ひるがえって、『大宋演義中興英烈伝』は、巻頭第三行に「書林楊氏清白堂梓行」の文字が見え、大尾に「嘉靖壬子年秋清白堂新梓行」の木記を有する『会纂宋岳鄂武穆王精忠録後集』を巻九として附刻している。しからば、同じ嘉靖三十一年に清江堂と清白堂は同時に『大宋演義中興英烈伝』（と『会纂宋岳鄂武穆王精忠録後集』）の刊行に関与したのか。清白堂の活動時期を嘉靖三十年代初期に遡らせることもあるいは可能かもしれない。筆者も以前はそのように考えていた⁶。だが、筆者は現在そのようには考えていない。清白堂は、木記や巻頭にもともとあった清江堂の江の字のみ白の字に埋木改刻するという手間を最小限に省く手法により、自らの当該書への関与を遡ってみせる手法を使ったのではなかったか。『全漢志伝』大尾の蓮牌木記の「清白堂楊氏梓行」の文字をよく見ると、清の字と白の字の間がやや開き、白の字の下に汚れがあるように見えるからである。

ここまで論じてきたことが正しいなら、『全漢志伝』の熊鍾谷原編本は嘉靖三十年代初期に清江堂によって刊行された可能性が高まろう。この点では汪燕崗⁷の説と一致する。そして、それが無図本だったか巻頭附図本だったかは別として、全相本でなかったこともほぼ確言できよう。では、清白堂が熊鍾谷原編本に果たした役割は那邊にあったのか。もちろん、清江堂の刊行した原編本を、同族の清白堂が後日全相本に仕立て直した可能性は否定できない。しかし、清白堂の主たる活動時期が万曆三十年代以降であるなら、『全漢志伝』はその時点ですでに全相本になっていたわけで、清白堂の関与は版木ないしは出版権の一部を買収した程度以上ではありえない。楊氏清白堂と愛日堂継葵劉世忠のいずれが先に『全漢志伝』に関わったかを明らかにするすべは今のところないが、『東西漢演義（兩漢演義）』が遅くとも万曆四十年までには刊行され（現存最古の刊本は万曆四十年金陵周氏大業堂刊の『重刻西漢通俗演義』八巻である）、その後はこれが漢代を対象とする歴史小説のスタンダードになった点に鑑みるなら、両者の『全漢志伝』への関与は、万曆十六年以降四十年までの高々二十数年でしかありえないことになる。であるなら、これを同時ないしは踵を接してとって大過ないのではあるまいか。なお、咸豊、同治間の維揚（揚州）に愛日堂という書肆の存在が知られる⁸が、蓬左文庫所蔵の『全漢志伝』に関

⁶ 「嘉靖定本から万曆新本へ——熊大木と英烈・忠義を端緒として」『東洋文化研究所紀要』124, 1994年。

⁷ 「『全漢志伝』与《兩漢開國中興伝誌》的成書」『明清小説研究』2007-3。

⁸ 韓錫鐸他、『小説書坊録』, 北京図書館出版社, 2002年。

わった愛日堂は、この書物が徳川家の蔵書となった時期からみて、この愛日堂ではありえない。杜信孚、杜同書のいう「福建省建陽書林蔡正河愛日堂」の可能性はあるが、この点については後日の調査に待つことにしたい。最後にあたり、これまで述べたことを一覧表としてみた。参照されたい。

附記

本稿は平成19年度～平成20年度科学研究費補助金（基盤研究(C)一般）の『平成19年度研究成果報告書』（2008年3月）に掲載したものを、その後の知見により一部修正したものである。

兩漢開國中興伝誌・全漢志伝版本源流考

大塚秀高

以下是将海内独享盛名的《两汉开国中兴传志》和《全汉志传》之蓬左文库藏本经过仔细的推敲，并针对其现存的文本如何编辑、乃至出版的经纬所作之论述。

关键词：《两汉开国中兴传志》，《全汉志传》，《汉书故事大全》，余氏，杨氏

全漢志伝

元・至治

明・嘉靖

第1ステージ

第2ステージ

第3ステージ

第4ステージ

第5ステージ

万曆16年?

万曆16年?以降

熊鍾谷・楊氏清江堂?

原編本 ×

全漢志伝?
西?漢卷1
西?漢卷2
西?漢卷3

→修改・
統合

原刊本(京本) ×

全漢志伝?
西漢卷1
西漢卷2
西漢卷3

→増刪・付加
→大略繼承
→簡略化
→増補・付加

→本文
繼承

増演本 ×

全漢志伝
西漢卷1
西漢卷2
増演卷3
刻卷4

→補作
附

万曆16年
名公・余世騰
新刊前集 ×

前集卷1(5)
前集卷2(6)

万曆16年
克勤齋・余世騰
新刊後集 ×

後集卷3(1)
後集卷4(2)
後集卷5(3)
後集卷6(4)

万曆16年?
文台余世騰
合刊本

全漢志伝
西漢卷1
西漢卷2
西前漢増演卷3
前漢刻卷4
前漢前集卷5
前漢前集卷6
東漢卷1
東漢卷2
後漢後集卷3
後漢後集卷4
後漢後集卷5
後漢後集卷6

→埋木
改刻

→附目録
十一

→括刊行

→

万曆16年?
劉世忠愛日堂 + 楊氏清白堂
修正合刊本 ○

全漢志伝
西漢卷1
西漢卷2
西前漢増演卷3
前漢刻卷4
前漢前集卷5
前漢前集卷6
東漢卷1
東漢卷2
後漢後集卷3
後漢後集卷4
後漢後集卷5
後漢後集卷6

→埋木
改刻

全相平話
前漢書

前集 ×
後集 ×
統集 ○

→修改・
統合

全相平話
後漢書

前集 ×
後集 ×

→小修改・統合・繼
承 全相本上図

→小修改・統合・繼
承 全相本上図

附加 全相本上図

原刊京版本 ×

兩漢開國中興伝誌
卷1・2・3a
卷3b・4
卷5・6

→大略繼承
→大略繼承
→大略繼承

→大略繼承
→大略繼承

第1ステージ

兩漢開國中興伝誌

万曆33年

黃化宇?・西清堂詹秀閩

再刊本 修正再刊本 ○

兩漢開國中興伝誌
卷1・2・3a
卷3b・4
卷5・6

兩漢開國中興伝誌
卷1・2・3a
卷3b・4
卷5・6

→埋木
改刻

第2ステージ